

Title	『経済学批判要綱』における商品論
Sub Title	Commodity theory in the Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1970
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.63, No.5 (1970. 5) ,p.353(1)- 377(25)
JaLC DOI	10.14991/001.19700501-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700501-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700501-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『経済学批判要綱』における商品論

遊 部 久 蔵

- 1 劈頭の商品の理論的性格
- 2 価値論の成立
  - i 価値本質論
  - ii 価値形態論
  - iii 価値実体論
  - iv 価値量論

本稿はかつて本誌『資本論』刊行百年記念特集<sup>(1)</sup>号に執筆した論文の続稿である。前稿においてはマルクスの商品論の成立の動機をとくに『経済学批判要綱』<sup>(2)</sup>(以下これを『要綱』と略記する。)における叙述について考察した。これによって一見きわめて抽象的とみえる商品論が実はユートピア社会主義(労働貨幣論)批判やブルジョア経済学(恐慌論)批判という実践的課題を担っていることがあきらかにされた。さらに商品論(価値論ではなくて)の経済学批判体系プランにおける位置を考察した。本稿においては『要綱』の段階において価値論の諸局面がどの程度まで成熟していたかを考察することによって前稿を補足し商品論の成立過程をこの段階について確定しようとするものである。

## 1. 劈頭の商品の理論的性格

マルクスの商品論がいかなる意義を有し、またいかなる構造を有するか、については、これをかれのもっとも完成された労作である『資本論』についてみなければならぬ。この点について、私はしばしばこれを論じてきた。<sup>(3)</sup>私たちが今日『要綱』について同一の課題をとりあげることの意義は、いうまでもなく『資本論』における商品論の成立過程を『要綱』の段階までさかのぼってたどると

注(1) 拙稿「商品論の成立」本誌60巻9号、1967年9月。以下「成立」と略記。

(2) K. Marx: Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857-1858. 1953. 高木幸二郎監訳。以下 Grundrisse と略記。

(3) ここではとくに三つの拙論をあげておきたい。i. 拙著『古典派経済学とマルクス』、1955、所収、第8章「商品論——ひとつのよみかた——」。ii. 慶応義塾大学経済学会編『日本における経済学の百年』上巻、1959、所収、拙稿「価値論研究史」。iii. 遊部他編『資本論講座』第1冊、1963、所収、拙稿「第1編商品論、II 研究と論争」。

いうことであるが、このことは単に学説の生成過程をしるといふにとどまらず、『要綱』がマルクスによって完成された著述ではなく「長い間隔をおいたいくつかの時期に、自分のために問題を解明する目的で書きとめられたもので、印刷するために書かれたものではない」『諸個別論文』<sup>(4)</sup>であることによって、私たちをして『資本論』における商品論の理解について示唆するところが多いのである。『資本論』を理解するにさいして、まずさしあたり、その叙述の順序に即しておこなわれねばならぬことはいうまでもないが、さらに叙述の順序としばしば背馳する研究の順序をたどることがまた叙述の内容について真に理解する上で貢献するところが乏しくないことは、いくつかの事例についてみるところである。それは同時に『資本論』における叙述のみに即して——というよりも<sup>(5)</sup>全く叙述の表面のみに即してといった方がより正しいであろう。——これを批判する批判者にたいして説得的な反批判をおこなうのに寄与すると考えられる。『要綱』における商品論の研究はこのような意義をもつと考えられる。

まず、はじめに私たちは前稿の経済学批判体系プランにおける商品論の位置についての考察の結論をもう一度みるとしよう。それによれば、1858年すなわち『経済学批判』刊行の前年におけるマルクスのこの問題についての結論では、体系の始原——すなわちのべる理由により正確には始原の端初——にくるものは商品であった。それは価値でもなければ、また生産一般でもなかった。価値はいわば商品の一要因として商品のうちに包摂され、また生産一般はむしろ商品の生産過程（それはまた資本の生産過程からの抽象である。）の一極である労働過程として始原である商品の後景にしりぞいたのである。なお注意していただきたいのは、——前稿でもしたように——私がここで商品論とよんでいるものは、体系の始原論という意義においては、『資本論』現行版第一編（初版第一章）「商品および貨幣」に該当するということである。マルクスのいくつかのプランにおいて「資本」または「資本一般」という項目にたいして「序章」または「序説」として特別のあつかいをうけていたものは商品のみではなく商品および貨幣の両者であるから、体系における始原の地位をしめるものはむしろ商品および貨幣であったことを想起していただきたい。商品<sup>(6)</sup>は厳密に言えば始原の端初ということになるであろう。

(4) K. Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (以下 Kritik と略記)。K. Marx-F. Engels Werke (以下 Werke と略記)。Bd. 13. 1961. S. 7. 杉木俊朗訳、国民文庫、p. 13.

(5) マルクスは『資本論』第2版後記でのべている。「もちろん、叙述の仕方は、形式上、研究の仕方とは区別されなければならない。研究は、素材を細部にわたってわがものとし、素材のいろいろな発展形態を分析し、これらの発展形態の内的な紐帯を探りださなければならない。この仕事をすっかりすませてから、はじめて現実の運動をそれに応じて叙述することができるのである。これがうまくいって、いまや素材の生命が観念的に反映することになれば、まるで先験的な (a priori) 構成にかかわり合っているかのようにみえるかもしれないのである。」(K. Marx: Das Kapital. Bd. 1. Werke. Bd. 23. 1962. S. 27. 大月書店刊『マルクス=エンゲルス全集』第23巻、p. 22. (以下 Kapital と略記。)) これ<sup>(6)</sup>がきわめて重要な指摘であることは、以下の本文の説明によってあきらかとなるであろう。

(6) 『要綱』においてその対象領域が「資本それ自体 (= 資本一般——引用者) と単純流通」とに限定されるとき (Grundrisse. S. 617. 訳、p. 681.)、後者のうちに商品および貨幣が包含されることはあきらかであり、また「交換価値と貨幣との単純な規定のうちすでに貨金と資本との対立等が潜在的にふくめられている」とのべられるとき (S. 159. 訳、p. 168.)、前者のうちに商品および貨幣が包含されることもあきらかであろう。

しかし始原を商品と解するにせよ商品および貨幣と解するにせよ、いずれにしても始原の位置にあるものは商品または商品および貨幣という物であり、したがってその研究は物の分析または物と物との関係の分析というかたちをとらざるをえないのであるが、これはいうまでもなくマルクスの独特の方法である物象化の理論によるのである。すなわち無政府的生産ということ<sup>(7)</sup>で特徴づけられる商品経済（単純商品経済および資本主義的商品経済）における人間関係（生産関係）が物と物との関係となってあらわれるところから、その研究もまたこのような物的外被をとおしてしかおこなわれえないということである。経済学の諸範疇は始原に位するものとかがらず、いずれも人間関係を物的に表示したものであり、また逆にたまたま人間がとりあげられているにしてもこのばあいは物の人格化としての人間でしかないということである。（人間の物化と物の人格化）この物象化の理論はすでに初期マルクスの段階において疎外論と明確に分離されない形態で展開されているが、『要綱』中のいくつかの文節において商品論に関連してこれがみられるのである。

「たがいに無関心な諸個人の相互的かつ全面的な依存性が、かれらの社会的関連を形成する。この社会的関連は交換価値において表現されている。」<sup>(8)</sup>「各ひとりひとりの個人にとっては生活の条件になっている、活動と生産物との一般的な交換、すなわちその相互的な関連は、かれら自身には無縁で、独立に、一個の物象として現われる。交換価値において、人間の社会的関係は物象の社会的なふるまいに転化され、人格的な能力は物象的なそれに転化されている。」<sup>(9)</sup>このような物象化に関する見解が基礎になって後述の商品生産者の労働の社会的性質の独特の証明の過程が解明されるのであるが、これは同時に労働貨幣論の批判の一環をなしている。貨幣の存在が社会的関係の物化を前提としているからである。「ここにおいて、人々は物象（貨幣）には信頼を寄せるが、その信頼を人間として自分自身に寄せることがない、と経済学者自身は言う。だがなぜ人々は物象に信頼を寄せるのか？ しかし物象とはいっても、明かに人間の相互の物化された関係、物象化された交換価値としてだけであり、しかも交換価値は、人間相互の生産的活動の一関係以外のなにものでもない。……貨幣が一つの社会的属性をもちうるのは、諸個人がかれら自身の社会的関係を、対象として自分自身から疎外しているからにすぎない。」<sup>(10)</sup>交換価値や貨幣が生産関係（の物象化）であると同様に資本もまたそうである。私たちは資本を必要とするが資本家を必要としないという社会主義者の見解が批判されているのも、「そのばあい、資本は純然たる物象としてあらわれ、生産関係としてはあらわれ<sup>(11)</sup>ない。」からである。

こうして物象化の理論の立場に立脚して経済学批判体系プランが構成され、その始原として商品および貨幣が措定されたのであるが、商品および貨幣によって物象的に表現されているものは商品

(7) 拙著『マルクス経済学』、1968. pp. 11-12, 29-31, 46-50 参照。

(8) Grundrisse. S. 74. 訳、p. 78. ・傍点は原文ゲシュペルト。以下同じ。

(9) ibid., S. 75. 訳、p. 78.

(10) ibid., S. 78. 訳、p. 81.

(11) ibid., S. 211. 訳、p. 223.

生産（商品経済）——そこでは貨幣がすでに登場しており商品流通がみられる。——であり、そこで人間関係（生産関係）である。そこで始原のまた端初に位する商品の理論的性格について説明するためには、マルクスが商品生産について『要綱』段階でどのような理解をもっていたかをしらねばならない。

マルクスの初期の経済学上の見解と『要綱』段階での見解とを明確に区別する一つの重要な点、かれが『要綱』の段階において商品生産と資本主義生産とを区別した点である。この点については、まず理論的に商品生産と資本主義生産との区別がなされていたこと——この点は後述の価値の本質把握に関連する商品生産の特徴の把握を基礎とするものであろう。——と歴史的な商品生産の発生および資本主義生産への移行が把握されていたことがあげられる。移行については、「貨幣の資本への転化」（『資本論』第1部第2編）、「商品生産の所有法則の資本制的取得法則への転変」（同第7編第22章）の理論の実質の存することに注目したい。このように商品生産と資本主義生産との区別と関係が明白にされることによってはじめて商品論の実践的意義が確立することはいうまでもない。<sup>(12)</sup>

『要綱』中にはあたかも劈頭の商品がもっぱら資本主義社会における商品にかかわるものであるかのような叙述がしばしば見出される。しかしそれらをよくよんで真意をうかがうことが必要である。

「価格は古くからあるし、交換も同様である。だが価格がしだいに生産費によって規定されるようになるのも、交換がすべての生産関係にいきわたるのも、ブルジョア社会、自由競争の社会ではじめて完全に発展するのであり、またつねにより完全に発展するのである。アダム・スミスが真に18世紀的な仕方、先史時代に措定し、歴史に先行せしめるものは、むしろ歴史の所産なのである。<sup>(13)</sup>」

この文節は価値法則の存在をいわば「先史時代」にみとめた上でその完全な支配をブルジョア社会にみとめようとするものであり、そういう意味で法則の発展をみとめているのである。スミスの見解もまた——一般に解されているように——けっしてスミスの叙述通りに価値法則の先史時代への措定を意味するものではなく、単にこのような啓蒙主義者流の表現の仕方をとったにすぎないこと、そしてマルクス自身もこれを理解していたことは、これをすでに私のあきらかにしたところである。<sup>(14)</sup>

「われわれの叙述がすすんでいるあいだに明らかになったことは、ひとつの抽象として現われていた価値は、貨幣が措定されたばあい、そのような抽象としてだけ可能であるということである。

(12) 「成立」 p. 38, 47-48 参照。

(13) Grundrisse, S. 74. 訳 p. 77.

(14) 拙稿「スミスのいわゆる『初期未開の社会状態』について」本誌1954年4月。拙著『労働価値論史研究』、1964; 所収。ちなみにマルクスはスミスの時代においても、「いまだ剰余だけが国民の大部分のあいだで交換されるにすぎない。交換価値と労働時間による規定とはまだ完全に発展していない。」(Grundrisse, S. 86. 訳 pp. 89-90.) とのべている。

他方においてこの貨幣流通は資本へとみちびき、したがって資本の基礎の上でのみ十分にこれを展開することができることは、一般に資本の基礎の上でのみ流通が生産のすべての契機をとらえることができるのと同様である。それゆえ説明にあたっては、資本のように、一定の歴史時代に属している諸形態の歴史的な性格だけが明らかになるのではない。それだけでなく価値のように純粋に抽象的に現われているような諸規定は、それが抽象されている歴史的な基礎、したがってそれがその上でのみこの抽象のかたちで現われることのできる歴史的な基礎をしめしている。そしてたとえば貨幣のように、すべての時代に多かれ少なかれ属しているような諸規定は、それがこうむっている歴史的な変形をしめしている。価値の経済学的概念は古代人のもとでは生じない。価格 (pretium) と区別された価値は、ごまかし等に対比してただ法律的に存したにすぎない。価値の概念はまったく最近代の経済学に属する。なぜならそれは資本自体と、そしてそれに依存している生産のもっとも抽象的な表現だからである。価値概念では資本の秘密がもたらされている。<sup>(15)</sup>

ここでのべられていることは厳密な意味での価値の経済学的概念が近代ブルジョア社会においてはじめて抽象されうる概念であるということであり、このような概念の成立しうるための条件が明白にされているのである。逆にいえば資本の萌芽がそのような価値概念のうちにひそんでいるということであるが、古代において、そしてまた中世において価値そのものの実在していたことはもちろん否定されていない。価値の経済学的概念は近代ブルジョア社会においてはじめて抽象されうるということであるが、つぎのように等価交換の法則がまた同じような関係にあることが示されている。「等価物のこうした交換がおこなわれるということは、交換なくして、しかも交換の仮象のもとで他人の労働を領有することに立脚する生産の表皮層であるにすぎない。このような交換の制度はその基礎としての資本に立脚している。そしてこの制度を資本から切りはなして、表面に現われているままに自立的な制度としてみたばあい、これはたんなる仮象であるが、しかし必然的な仮象である。だから交換価値の制度——労働によって測定された諸等価物の交換——が、交換なしの他人の労働の領有、労働と所有との完全な分離に転回する、というよりはむしろ、そのかくれた背景としてそれをしめしているということは、いまではもはやおどろくにあたらない。<sup>(16)</sup>」

ここでは価値法則の資本制的性格が示されており、前述の価値と資本との密接な関係が、いわゆる「商品生産の所有法則の資本制的取得法則への転変」が転変というよりもむしろ前者がその背後にもっている後者への回帰であるというかたちで、つまり全く論理的抽象の次元での関係として語られているのである。

さらに純粋性における価値、価値規定は資本主義的生産様式を前提とするが、価値規定の個々の契機が社会の初期に属していることは、つぎのようにみとめられている。

「理論においては、価値の概念が資本の概念に先行しはするが、他方その純粋な展開のためには、

(15) ibid., S. 662. 訳 pp. 729-730.

(16) ibid., S. 409. 訳 p. 445.

ふたたび資本を基礎とした生産様式を想定するとすれば、同じことは実際にも生じる。したがって経済学者たちは、一方ではやはり、やむをえず資本を諸価値の創造者、その源泉とみなしたが、他方では資本の形成のために諸価値を前提し、そして資本自体をたんに一定の機能における諸価値の総額としてのべている。その純粋性と一般性での価値の実存は、個々の生産物が、生産者一般にとって、またなおのこと個々の労働者にとって生産物であることをやめ、流通による実現なくしては無であるような生産様式を前提としている。1ヤールのキャラコの極小部分をつくる者にとっては、それが価値であり、交換価値であることは、なんら形式的な規定ではない。もしかかれが交換価値、貨幣を創造しなかったとすれば、かれはおよそなにも創造しなかったことになる。こうしてこの価値規定自体が、社会的生産様式の一定の歴史的段階をその前提としており、それ自体それによってあたえられた、したがって歴史的な関係である。

他方において、価値規定の個々の諸契機は、社会の歴史的生産過程の初期の段階に発展し、その成果として現われる。

したがって、ブルジョア社会の体制の内部では、価値には直接に資本がつづいている。歴史においては、より不完全な価値展開の物質的基礎をなしている他の諸体制が先行する。交換価値がこのばあい使用価値とならんでたんに副次的な役割を演じているにすぎないように、資本ではなく、土地所有関係がその実在的基礎として現われる。<sup>(17)</sup>

さらにマルクスは流通を基礎とする所有、自由、平等の三位一体の完成が17、18世紀の英仏伊の経済学者によって定式化され、またこのような三位一体がはじめて実現されたのは近代ブルジョア社会においてみられたとて、古代世界では——中世世界においても同じであるが——交換価値が生産の基礎ではないし、したがって交換価値の発展につれてこのような世界は解体せざるをえなかったので交換関係以外のものをふくむ平等と自由とは実現することなく、本質的にはむしろ地方的な (lokal) 内容をもつ自由、平等がみられたにすぎないとてながら、つぎのようにのべているのである。「他方、古代世界では自由民の仲間のなかで、少なくとも単純流通の諸契機が発展したので、ローマ、とくに帝制時代のローマでは——その歴史はまさに古代の共同体の解体の歴史である。——法律上の人格や交換過程の主体についての諸規定が展開され、ブルジョア社会の法律は、その本質的諸規定からすれば仕上げられていたのであって、しかもとりわけ中世に対抗して発生しつつある産業社会の法律として貫徹されねばならなかったということが明らかである。」<sup>(18)</sup>マルクスはこの文章にひきつづいて交換価値を万人の自由と平等との制度として理想化し、これが貨幣や資本など

(17) *ibid.*, S. 163. 訳. p. 172. 傍点は引用者による。以下同じ。

(18) *ibid.*, S. 916. 訳. p. 1036. なお SS. 156-7. 訳. pp. 164-6 参照。1884年6月26日付カウツキー宛手紙においてエンゲルスはローマ法についてつぎのようにのべている。「ローマ法は単純商品生産の、つまりしたがって前資本主義的商品生産の、完成された法であるが、しかし、この商品生産は資本主義時代の法律関係をもたいてい包含している。」(K. Marx-F. Engels: Briefe über „Das Kapital“. Besorgt vom M.-E.-L.-S.-Institut beim ZK der SED. 1954. S. 289. 岡崎次郎訳、国民文庫、p. 331. 以下 Briefe と略記。)

によって変造されたと考えているフランス社会主義者たち (たとえばブルードン) を批判しているのであるが、ここには歴史上古代 (および中世) に実在した商品生産の有する萌芽としてのブルジョア的性格とその資本主義生産への移行の必然性が示されているといえる。したがって劈頭であつかわれる商品がそれ自身ブルジョア社会における商品からの抽象物でありながらこのような歴史上の過去に実在した商品生産のもとでの商品とあるつながりを有しうるのは、まさに商品生産そのもの上記の性格によるものであろう。

なおマルクスは単純流通は歴史的に存在可能であり、またそれがブルジョア的生産にすすむかどうかは、歴史的に証明されるとのべているが、しかしひきつづき上記のことを例示するさいにこれを「歴史的回帰」(historische Rückgang) とよんで<sup>(19)</sup>いる。「回帰」というのは、いうまでもなく、ブルジョア的生産が萌芽としてはじめにそこに存在していた単純流通へ回帰するという意味である。

「けれどもここでわれわれは、流通の資本への歴史的移行を論ずるわけにはゆかない。単純流通は、むしろブルジョア的総生産過程の抽象的な一局面であり、この局面はそれ自身の諸規定によって、その背後に横たわり、その結果として出てくるとともにそれを生産しつつあるより深い過程の——産業資本の——契機として、たんなる現象形態として実証される。<sup>(20)</sup>

このようにマルクスは『要綱』において単純流通の歴史的実在とブルジョア的生産への歴史的移行とをみとめながらそれについてはのべないで (といってもこれについての指摘と断片的記述とはある)、単純流通はブルジョア的生産の抽象的一局面であり、この局面は産業資本の契機、単なる現象形態として実証されるという立場にある。そして劈頭の商品とはまさにこのような単純流通における商品であるといえよう。貨幣についても同じようなことがいえる。

「貨幣と商品、ならびに流通における両者の関係は、いまや資本の単純な諸前提として現われるとともに、他方では資本の定有形態として現われる。資本にとっての単純な現存の要素的な諸前提として現われるとともに、他方ではそれ自身資本の定有諸形態と諸結果として現われる。」<sup>(21)</sup>「一方では、単純流通は商品の現存する前提であり、そして流通の両極、貨幣と商品とは、要素的諸前提として、可能性のうえで資本になりつつある諸形態として現われるか、あるいはそれらは、前提された資本の生産過程のたんに抽象的な局面にすぎない。他方ではそれらはその深淵としての資本に復帰する、すなわち資本にまで到達する。(ここに上記の歴史的事例を。)<sup>(22)</sup>

これらの記述はいずれも劈頭の商品の認識 (抽象) 過程におけるブルジョア社会の前提を示すものであるが、同時にそこにはその有する歴史上の単純商品とのつながりが含蓄されていることに

(19) *ibid.*, SS. 921-2. 訳. pp. 1042-3.

(20) *ibid.*, SS. 922-3. 訳. p. 1044.

(21) *ibid.*, S. 937. 訳. p. 1060.

(22) *ibid.*, S. 938. 訳. p. 1061. この末文で筆者によって傍点を附された「ここに上記の歴史的事例を。」とのべていることの内容は、編者注によれば、「対外貿易の文明化作用」の事例としてあげられている歴史的諸事実 (*ibid.*, S. 921-922. 訳. pp. 1042-3.) である。

私たちは想いをいたすべきであろう。要するに劈頭の商品を純粹の論理的抽象の産物としてのみ解することは、一面的な理解の仕方であるといわねばならない。

さらにここで注意されねばならないのは、「単純流通」または「流通」という言葉が一般に当面の問題の個所において使用されていることから、商品生産（または商品経済）の一面的理解すなわち商品生産を単に商品流通の側面においてしか理解しないという見解のうまれることである。しかしながら商品流通（「単純流通」または「流通」）は商品生産（または商品経済）の一抽象面ではないのである。このことはあらためて『要綱』中から引用するまでもないが、ここに二つの文章をあげるとしよう。

(1) 「交換価値、貨幣、価格が考察されるこの第一編では、諸商品はつねに現存するものとして現われる。形態規定は単純である。私たちは諸商品が社会的生産の諸規定を表現することをしてしているが、しかし社会的生産そのものは前提である。しかも諸商品はこうした規定で措定されているのではない。」<sup>(23)</sup>これは経済学批判体系プランののべられている文節の冒頭である。諸商品は社会的生産の諸規定を表現するが、しかし社会的生産は前提されているにとどまるからここではそれによって措定されていない。したがってあらかじめ社会的生産についてのべることなく、いわばあたえられたものとしての商品の分析に着手しようということであるが、これは単に劈頭の商品の叙述の仕方に関するものである。私たちは当面この問題に関するマルクスの研究の仕方を明白にすることによってこの叙述の裏側にある真の内容を理解しようとするものである。

(2) 商品生産と商品流通とは相互に前提しあい関連するが前者が窮極の規定者である。したがって商品流通はその背後でおこなわれていること（商品生産）の現象であり、単に形式的な過程であり、それ自体のうちに自己更新の原理をもっていないことがつぎのように示されている。商品流通があたかも措定者であるかのようにあらわれるのは、じつは商品生産を表現するかぎりにおいてであり、このような関係を商品流通が失えばそれは全くの無として否定されざるをえない。したがって流通が措定者となるのは生産へ復帰することを意味する。「貨幣または商品という両点からの過程の反復は、交換自体の諸条件のうちに措定されてはいない。この行為が反復されるのは、それが完成されるまでのあいだ、すなわち交換価値の総額まで交換されるまでのあいだだけである。この行為は、それ自体でみずから新たに起ることはできない。だから流通は、それ自体のうちに自己更新の原理をもっていない。更新の諸契機は、流通にとって前提されているのであって、流通自体によって措定されているのではない。商品がたえず新たにしかも外部から流通に投じられなければならないのは、ちょうど燃料がたえず火に投じられなければならないのと似ている。でない、流通は無為のなかに消えさる。それは、無為なる結果としての貨幣において消えうせ、この貨幣は、もはや諸商品、諸価格、流通との関連をもたなくなるかぎりでは貨幣ではなくなり、生産関係を表現しな

(23) *ibid.*, S. 138. 訳. p. 146.

くなるであろう。もはやその金属的定有だけがのこり、その経済的定有は消滅してしまうであろう。したがって、流通は、ブルジョア社会の表面に直接現存するものとして現われるが、それは、流通がたえず媒介されているかぎりにおいてのみである。それ自体において考察すれば、流通は前提された両極の媒介である。だが流通はこの両極を措定しはしない。したがって、流通はやはりその諸契機のそれぞれにおいてばかりでなく、媒介の全体として、総体的な過程そのものとして媒介されていなければならない。だからその直接的存在は純粹の仮象である。それは、その背後でおこなわれている過程の現象である。それはいまやその諸契機のそれぞれにおいて——商品として——貨幣として——そして両者の関係として、両者の単純な交換および流通として、否定されている。もし本来的には社会的生産の行為は、交換価値の措定として、またこの措定はさらに発展しては流通として——諸交換価値相互の完全に発展した運動として——現われたとすれば、いまや流通そのものが、交換価値を措定するすなわち生産する活動にかえってくる。流通がこの活動にかえってくるといことは、すなわちその基礎にかえるということである。

流通に前提されているものは、一定の労働時間の実現であり、またそうしたものとして価値であるところの諸商品（特殊の形態にある商品であろうと、貨幣という一般的形態にある商品であろうと）である。したがってその前提は、労働による諸商品の生産であるとともに、交換価値としてのそれらの生産でもある。このことは流通の出発点であり、また流通はそれ自身の運動によって、その結果としての交換価値を創造する生産にたちかえる。したがってわれわれはふたたび出発点に、すなわち交換価値を措定し、創造する生産に到達するのであるが、しかしこんどは、生産が流通を発展した契機として前提し、そして流通を措定するところの、またたえず流通から自分自身にたちかえってはふたたび流通を措定するところのたえざる過程として現われるというふうになる。したがってここでは交換価値を措定する運動はいまや、それがもはやたんに前提された諸交換価値の運動、いいかえれば諸交換価値を形式的に価格として措定する運動であるばかりでなく、また同時にそれを前提として創造し、生産する運動であるために、ずっと複雑な形態で現われる。ここでは生産そのものは、もはやその結果にさきだって現存しているすなわち前提されているのではなく、これらの結果を同時にみずから生みだすものとして現われる。だが生産はもはや、最初の段階でのように、たんに流通にみちびくものとしてばかりでなく、同時に流通を、発展した流通をその過程のうちに想定するものとして生みだすのである。（流通は結局、あるときは交換価値を商品の規定において、またあるときは貨幣の規定において措定する、たんに形式的な過程にすぎない。）<sup>(24)</sup>

マルクスのこのべているところを全体としてみると、単純流通としてとらえられているものが商品生産のうちに統一されている商品流通の、それから抽象されたものであることはあきらかであり、また商品生産と商品流通との統一としての一つの生産体制（経済制度）＝商品生産（商品経済）が歴

(24) *ibid.*, SS. 166-7. 訳. pp. 175-6.

史上資本主義生産以前に実在したこと、またこのような歴史上実在した商品生産(商品経済)と概念としての商品生産(商品経済)との間に関連が存することもあきらかである。最後の点については、つぎのようにのべられていることが参考となるであろう。「科学の歩みからみれば、これらの抽象的諸規定(交換価値など——引用者)は、部分的には歴史的にも先行して現われるように、まさに最初の、もっとも素朴なものとして現われる。より発展した規定はより後のものとして現われる。」<sup>(25)</sup>

ここで多少誇張した表現をゆるされるならば、『要綱』をよんで気付くことは——これは『要綱』とかぎらず『経済学批判』や『資本論』についてもいえることであるが、『要綱』は完成された著書でなければこれがより鮮明にあらわれるのである。——、そこに二人のマルクスがいるということである。一人は概念の自己展開として体系を展開しようとするマルクス、——あるものがのちにそれ自体を止揚してより高度のものへ発展すべき要因を自分自身の内部にふくんでいると考え、すべての事象をはじめに分析されたものいけば自己展開(それは同時に上述の理由によって自己回帰でもある)としてみていこうとする、それ自体としては一種の論理主義(Logismus)の立場にあるマルクス。もう一人は実在的関係を歴史的にまた経験的にあきらかにしていこうとする実証主義(Positivismus)の立場にあるマルクス。<sup>(26)</sup>もちろんこの二つの立場はマルクス一人において統一されたものであるにちがいないが、その統一の仕方について今日私たちが理解することは必ずしも容易であるとはいえないのである。マルクス経済学者——マルクスではなくて——のいうところの「論理的=歴史的方法」はこの統一の仕方についての理解のころみの一つを示すものであると思われるが、確固たる学説としてみとめられているわけではない。ここに興味あることは、マルクス自身が『要綱』中において論理主義的展開法にたいして自ら反省し不満の意を表明していることである。かれは「交換過程」にひきつづき「恐慌の可能性」を論じてから、つぎのように概念の自己展開(自己運動)的叙述様式についてのべている。「この問題からはなれる前に一言すれば、諸概念規定やこれらの概念の弁証法だけが問題であるかのような外見をもたらす観念論的な叙述方法(die idealistische Manier der Darstellung)を、訂正しておくことがいずれ必要になるだろう。したがって、とりわけ、

(25) *ibid.*, S. 159. 訳. p. 167.

(26) 同一問題に関して論理主義と実証主義との二つの立場の並存の事例を——ただし本文でものべたようにこいう表現には多少の誇張がともなうことを許していただければ——『資本論』中にもとめれば、(1)貨幣の成立についての価値形態論(第1部第1章第3節)と交換過程論(同第2章)、(2)資本の成立についての「貨幣の資本への転化」論(同第4章)と原始的蓄積論(同第24章)、(3)価値の生産価格への転化についての理論的説明と歴史的説明(第3部第2編)など。(1)、(2)、(3)の問題について戦前より国内国外で論争のおこなわれている所以でもある。

(27) Grundrisse. S. 69. 訳. pp. 72-73. なおこの一文に関する編者注を参照されたい。ロスドルスキーは同じく『要綱』のこの文章を引用して曰く「換言すれば、経済的諸範疇が現実的諸関係の模写以外のものでありうるとか、このような諸範疇の論理的誘導が歴史的誘導とは独立におこなわれるとかいう見解が読者に生じてはならない。」(R. Rosdolsky: Zur Entstehungsgeschichte des Marx'schen »Kapital«. 1968. S. 144.)かれはさらにそこで、しばしば「論理的=歴史的方法」の典拠とされているエンゲルスの『経済学批判』書評中の一文(Kritik. S. 475. 訳. pp. 263-4.)を引用している。当のエンゲルスは1858年4月9日付マルクス宛手紙で曰く「この摘要(1858年4月2日付、エンゲルス宛マルクスの手紙での『経済学批判』の摘要——引用者)の抽象的弁証法的な調子は完成稿ではもちろんなくなるのだから。」(Briefe. S. 92. 訳. p. 89.)

生産物(または活動)が商品に、商品が交換価値に、交換価値が貨幣になる、といったフレーズが問題だ。」<sup>(27)</sup>

マルクスのいうところの「観念論的な叙述方法」は、上述したところの物象化の理論や抽象というかれの独特の方法と密接な関係があるように思われるのである。すなわち経済学の対象が生産関係であるにもかかわらずこれを生産関係そのものとしてではなくその物象化した関係において把握するという、さらにまた抽象(下向)によってえたものを再構成(上向)して展開(自己回帰)するという——当面マルクスの単純流通の叙述を念頭に思いうかべていただきたい。——は、物象化された、抽象された関係の背後にある実体的なものとの関連が読者に明示または暗示されるようなかたちでおこなわれないうかぎり、たしかに「観念論的な叙述方法」となるおそれが多分にあるのである。もっとも『資本論』のようにこれらの点を十分に留意した完成度の高い労作についてすら、とくにマルクスの上記の方法について全く無関心な読者の側からマルクスの懸念した「観念論的な叙述方法」という批判をまぬかれえなかったところである。マルクス自身はあきらかに論理的方法と歴史的方法との統一という見解をいいており、それだからこそかれはすでにのべたように単純流通を歴史的に存在可能であるとみなし、またそれがブルジョアの生産にすすむかどうかは歴史的に証明されるとみたのであるが、これを「歴史的回帰」とよんだとき、まだそこにロギスムスの臭いがのこっているとはいえないであろうか?

## 2. 価値論の成立

周知のように商品論の構成は、『資本論』において、(1)商品の二つの要因。使用価値と価値(価値の実体、価値量)、(2)商品に表わされる労働の二重性、(3)価値形態または交換価値、(4)商品の物神的性格とその秘密、の順序であるが、これを価値論の構成という観点からみると、(1)価値の実体、(2)価値の量、(3)価値の形態、(4)価値の本質の順序となる。しかしこれは叙述の順序であって、研究の順序をそのまま示すものではない。研究の順序はむしろ、(1)価値の本質、(2)価値の形態、(3)価値の実体、(4)価値の量であるかのように思われるのである。いまこの点を簡単にのべれば、マルクスは経済学の方法としての歴史的観点に立脚して労働生産物の商品形態にとくべつの関心をいただきこれ

(28) マルクスの商品論の展開のうち、たとえばベーム・バヴェルクは「昔のスコラ的、神学的『等価』観」(E. v. Böhm-Bawerk: Zum Abschluß des Marx'schen Systems. 1896. E. v. Böhm-Bawerks kleinere Abhandlungen über Kapital und Zins. Bd. 2. 1926. S. 383. 竹原八郎訳. p. 109.)、「鯉の如く滑かなる弁証法的技巧」(S. 386. 訳. p. 114.)、「手品」(S. 388. 訳. p. 117.)を見出し、シュンペーターは「アリストテレスと同じような妄想」(J. A. Schumpeter: Ten great Economists. 1951. p. 27. note. 中山伊知郎・東畑精一監修訳. p. 44.)を見出し、ロビンソン夫人は「純然たる独断的論述」(J. V. Robinson: An Essay on Marxian Economics. 1949. p. 12. 戸田武雄・赤谷良雄共訳. p. 15.)、「神秘主義」(p. 15. note. 訳. p. 29.)、「呪文」(p. 22. 訳. p. 26.)を見出し、パレートは「神秘的實在」(V. Pareto: Les systèmes socialistes. tome 2. (Œuvres complètes. tome V. 1965. p. 343.)や「非常に多数の範疇」(Introduction a Marx. (Œuvres complètes. tome IX. 1966. p. 39.)を見出している。

を解明することによって、そもそも価値とは何であるかという価値の本質をあきらかにすることができた。これによってかれは商品形態に固有の価値の形態を、さらに商品形態の発展に照応する価値形態の発展をあきらかにすることができた。だから資本主義的生産様式を歴史的に生成したものとではなくあたえられたものとしてうけとる古典派経済学によっては商品形態にとくべつに関心をいさぐこともなく価値の本質も、価値の形態も解明されるはずがないのである。

「古典派経済学の根本欠陥の一つは、商品の、とくに商品価値の分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけたことに成功しなかったということである。A・スミスやリカードのような、その最良の代表者においてさえ、価値形態をまったくどうでもよいものとして、または商品そのものの性質には外的なものとして取り扱っているのである。その原因は、価値量の分析にすっかり注意を奪われてしまったということだけではない。それは、もっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョアの生産様式の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態であって、これによってこの生産様式は、社会的生産の特殊な一種類として、したがってまた同時に歴史的に、特徴づけられているのである。それゆえ、この生産様式を社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては貨幣形態や資本形態などの独自性をも看過することになるのである。<sup>(29)</sup>」

この引用文中においてマルクスがのべているのは、古典派経済学の非歴史的観点に由来する価値形態論の欠如ということであるが、同一の理由から価値本質論の欠如も推論されうるし、またこの二つの欠如の関係が重要であると思われる。ちなみにこの文章が価値本質論を展開している第四節「商品の物神的性格とその秘密」中の一文であることに注意されたい。

価値形態論が成立すれば価値実体論の成立は容易におこなわれる。というのは、価値の形態があきらかにされることによって価値と交換価値との関係（両者の区別をふくむ）が明白にされ、交換価値とは独立に価値そのものの研究が可能とされるから、はじめて価値の実体が解明される。<sup>(30)</sup> こうして価値の実体論が成立すればおのずから価値の量論は成立する。というのは、価値の量とは価値の実体の量にはかならないから、実体が何であるかが決定すれば、おのずからその大きさによって価値

(29) Kapital. Bd. I. S. 95. 訳. p. 108.

(30) トゥーホシェーレルはいう。「マルクスの商品の物神性の分析は商品に対象化されている労働の独特の性格の研究に到達する。それは『要綱』においてはじめて私たちが出あうところの研究である。この研究はマルクス価値論の基礎づけにとって決定的意義をもっている。というのは、ここに商品に対象化されている労働の二重性の発見が存するからである。マルクスは『要綱』においてこの用語をまだ使用しないで、かれの著書、『経済学批判』ではじめて商品と商品を生産する労働との「二重性」についてのべているとはいえず、かれは事実上すでに『要綱』で商品と商品にふくまれている労働との二重性を発見している。」(W. Tuchscheerer: Bevor „Das Kapital“ entstand. 1968. SS. 381-2.) 以下 S. 396 にかけてこのことが解明されているが物神性論（それは私見によれば価値本質論をふくむ。）から価値実体論へ直接すすむのではなく両者の中間に価値形態論が存するのである。ツイゴツキーはいう。「使用価値と価値とへの商品の分解、商品の二つの要因の分析、交換過程において商品と貨幣とへの商品の二重化が必然的となるということの証明——これらすべてが商品をつくりだす労働の二重の性格の発見にマルクスをみちびいた。」(W. S. Wygodski: Die Geschichte einer großen Entdeckung. Über die Entstehung des Werkes „Das Kapital“ von Karl Marx. 1967. S. 60.)

量も決定することとなるであろう。もちろん価値の諸局面の研究は上記のように単純に直線的におこなわれるわけではなくむしろ平行的におこなわれつつ相互に関連し合いこういう関係のなかで個々の局面に関する研究が順々に成立していくのであるが、研究過程を全体としてたどっていくといわば個々の局面に関する研究の総合、総括とも考えられる価値の本質論がまず成立し、そのさいあらかじめそこに予想され前提されていた他の諸局面に関する個々の研究もこれを基礎にしてはじめてつぎつぎに確立していったと考えられるのである。以下の価値の諸局面に関する研究の成立の過程として示されるものがじつはそのようなジグザグした多元的研究の過程をいわば事後的に論理的に直線的・一元的に方向づけて整序したものであることを注意していただきたい。

### 1 価値本質論

価値の本質が理解されるためには、まず商品生産（商品経済）とは何であるかというその特徴が理解される必要がある。価値という性質が発生するのは労働生産物一般ではなくその商品形態をおびたものにかざられるから、商品という形態で物象化されてあらわされている商品生産（商品経済）について理解する必要があるのである。

商品生産の根本的前提は私的所有と社会的分業とである。この両者が結合して無政府的生産のおこなわれることが商品生産の特徴である。この二つの根本的前提について『要綱』中の『『経済学批判』の原初稿の断片』〈5〉単純流通での領有法則の現われ〉の冒頭においてのべられている。「労働と自己の労働の成果の所有とは、それなくしては流通を通じての第二の領有がおこなわれなような、根本的前提として現われている。自己の労働のうえにうちたてられた所有が、流通の内部で、他人の労働の領有の基礎を形成している。<sup>(31)</sup>」運動の全体に関係する交換のもう一つの前提は、交換の諸主体が社会的分業のもとに包括されて生産するということである。<sup>(32)</sup> だがこの社会的分業は社会的分業一般ではなく社会的分業の特有の発展した一形態である。これはいうまでもなく一方には私的所有が根本的前提として存在するからであり、その結果交換価値の生産として生産がおこなわれるからである。個々人はペルーやインドにみられる自然生共同体の成員として生産したのではなく、かれ自身にとっては自然必然性としてあらわれるような生産諸条件と交易諸関係のもとで生産したのである。

だが私たちが『要綱』の商品生産——その性質は同時に資本主義生産の抽象的一面にはかならないから、資本主義生産をもそのかぎりで特徴づけている。——に関する叙述をよみながら、そこに見出さなくてはならないのは商品生産の深部で共同的生产（gemeinschaftliche Produktion）のおこなわれていることについてのマルクスの洞察である。このような洞察はすでに 1840 年代の初期の労働

(31) Grundrisse. S. 902. 訳. pp. 1022-3.

(32) ibid., S. 905. 訳. p. 1025.



作中にみられるのであるが、<sup>(33)</sup>『要綱』中にもしばしばみられるのである。たしかにマルクスはそこで商品生産と共同的生産とを比較し後者においては「時間の節約」(Zeitersparung)＝「時間の経済」(Ökonomie der Zeit)を内容とする「時間規定」(Zeitbestimmung)および「労働時間の計画的配分」がおこなわれることをのべ、それが価値規定や価値法則のおこなわれる商品生産との本質的相違とみなされているようであるが、<sup>(34)</sup>この両者の間に共通な点の存することもあきらかである。すなわち「時間規定」および「労働時間の計画的配分」はあらゆる経済が結局そこへ帰着する広義の経済原則ともみなすべきものであるから、それは商品生産においても貫徹すると考えられるのである。ただ貫徹の仕方が商品生産と共同的生産とにおいて相異なり、ここに後述の商品生産のもとでの労働の独自の社会的性格が発生するのである。

このような商品生産のもっている二面性——一面では人間の類的存在の否定であり他面ではその肯定であるという矛盾した性格——は、貨幣において例示される。すなわちマルクスは貨幣の第三規定(蓄蔵貨幣、支払手段、世界貨幣としての貨幣)での発展が古代の共同体をやぶることをみとめながら、貨幣が——これはブルジョア社会についてであるが貨幣がすべての人にとっての生存の一般の実体であるかぎり——「直接に実在的な共同体(das reale Gemeinwesen)<sup>(35)</sup>」でもあるとのべている。マルクスは労働による価値の尺度をのべたさい、それが「交換、組織されていない社会的労働——社会的生産過程の一定段階」と関連しているということを暗示し、労働を犠牲として解するスミスの労働の心理的把握における労働の社会性の認識の欠如を批判して「積極的・創造的活動」(positive schaffende Tätigkeit)<sup>(36)</sup>として労働をみとめているのであるが、これは資本主義社会における労働の類的活動としての積極的意義をのべたものであると解してよいであろう。さらに商品生産における「共同的類的存在(gemeinschaftliches Gattungswesen)」はつぎのように具体的に指示されている。すなわち商品生産において形式的に区別されている三つの契機として、(1)交換者、(2)等価物、(3)交換という行為自体があげられ、さらに交換行為の外にある、その意味で経済的形態規定の外部にある内容として、(1)交換される商品の自然的特殊性、(2)交換者の特殊の自然的欲望、あるいは(1)(2)をあわせて交換される商品の相異なる使用価値があげられている。「交換の経済的規定のまったく外部にあるこの交換の内容は、諸個人の社会的平等をそこなうどころか、むしろかれらの自然的相違をかれらの社会的平等の基礎とするのである。個人Aが個人Bと同一の欲望をもち、また個人Bと同一の対象にかれの労働を実現したとすれば、かれらのあいだにはなんの関係も存在しないだろうし、かれらの生産という面からみれば、かれらはなんら相異なる諸個人ではないこと

(33) 拙著『マルクス経済学』pp. 8-9, 34-35.

(34) Grundrisse, S. 89. 訳, p. 93. なおこの個所の文章の解釈については、杉原四郎「マルクスの経済本質論に関する一考察」『三谷友吉博士還暦記念論文集』1963年、所収、同著『マルクス経済学の形成』1964年、pp. 125-7. 参照。

(35) Grundrisse, S. 137. 訳, p. 144.

(36) ibid., S. 507. 訳, p. 557.

になろう。……かれらの欲望とかれらの生産との相違は、交換とそして交換におけるかれらの社会的等置への動機をあたえるにすぎない。だからこの自然的相違は、交換行為におけるかれらの社会的平等とかれらがたがいに生産的なものとしてはいりこむこの関係一般との前提なのである。この自然的相違からみれば、個人AはBにとっての使用価値の所有者であり、BはAにとっての使用価値の所有者である。この面から、自然的相違がまたかれらを交互的に平等の関係におく。だがこの点からみれば、かれらは相互に無関心ではなく、たがいに足りぬものをおぎない、たがいに要求しあうのであって、個人Bは、商品に客体化されたものとしては個人Aにとっての欲望であり、また反対のばあいは反対である。したがって、かれらは相互に平等の関係にあるばかりでなく、社会的関係にもあるのである。それだけではない。こうした一方の欲望を他方の生産物によって満足させることができ、またその逆もできるということ、また一方は他方の欲望にむけて対象を生産することができる、またそれぞれがたがいに他方の欲望の対象の所有者として対しあうということは、それぞれが人間として、自分自身の特殊の欲望等に干渉し、かれらがたがいに人間としてふるまうこと、かれらが共同的類的存在であることが万人によって知られているということ<sup>(37)</sup>を証明する。こうして交換価値を基礎にして近代社会におけるあらゆる平等と自由——交換関係以外の領域における平等と自由とをふくむ。——が成立するが、これが古代や中世の世界における平等や自由と対立することはすでに言及したところである。

人間がつねに生産の目的としてあらわれる古代の見地の方が生産が人間の目的として、富が生産の目的としてあらわれる近代世界にくらべて非常に高尚であるように思われるが、「ところが事実上(in fact)、偏狭なブルジョアの形態を皮むけば、富とは、普遍的な交換によって作りだされる個人の欲望、能力、享楽、生産力等の普遍性でなくてなんであろう?」<sup>(38)</sup>「ブルジョア経済——そしてそれに対応する生産時代——においては、人間内奥のこの完全な創出は、それを完全に空にすることとして現われ、この普遍的対象化は絶対的疎外として現われ、そしていっさいの定められた一面的な目的の廃棄は、自己目的をまったく外部的な目的のために犠牲にすることとして現われ<sup>(39)</sup>る。」「人間は歴史的過程を通じてはじめて個別化される。かれは本源的には一つの類的存在(Gattungswesen)、種族的存在(Stammwesen)、群居動物(Herdentier)として——けっして政治的な意味での一個の社会的動物としてではないけれども——現われる。交換自体はこの個別化の主要な一手段である。交換は群居生活を無用化し、それを解体する。しかし、人間は個別化されたものとして、もはや自分自身にだけ関係するというように事態が一変すると、個別者としてみずからを持するための手段は、かれの自己普遍化また共同化となっている。」<sup>(40)</sup>

(37) ibid., S. 154. 訳, pp. 162-3.

(38) ibid., S. 387. 訳, p. 421.

(39) ibid.

(40) ibid., SS. 395-6. 訳, p. 430.

このように商品生産においては——資本主義生産が資本主義的商品生産であるかぎりそこにおいても、いなむしろそこにおいてこそすぐれて——社会的分業のもとにおこなわれる労働は結局社会的性格をおびているが、商品生産と対比される共同的生産におけるようにはじめから社会的性格を指定されているのではなく交換にさいして一般的労働として指定されることによってはじめて社会的労働として指定される。この点は『資本論』の物神崇拜論の節においてはきわめて明白に叙述されている。すなわち価値の実体である一般的労働は交換の基礎である相等性として社会的性格をあたえられ、しかもその社会的性格は相等性が労働そのものの相等性としてではなく価値の相等性としてあらわれる点において「独自の・社会的性格」としてみなされており、労働のこのような性格——「独自の・社会的性格」が商品の物神的性格をうむ一因とされているのであるが（もう一つの理由は自然素材と結合して商品の使用価値の実体となる具体的・有用的労働の「独自の・社会的性格」である。）、<sup>(41)</sup>『要綱』においてもこれに類する叙述があり、したがってそこにも私たちは価値の本質論を見出さうと思う。しかもこの叙述が前に言及した共同的生産における「時間規定」および「労働時間の計画的配分」を論じる個所に先立つ個所でなされていることに私たちは注目したい。

商品生産者の労働の私的にして同時に社会的であるという矛盾した性格の認識が基礎になって商品の二要因——使用価値と価値——の対立が認識される。『要綱』においてはこの点の認識は——それは『資本論』におけるほど明確に定式化されていないが、その不十分さは『要綱』が完成稿でないためにこうむる制約を考えるとかなり割引きされるであろうから——一応の實質を有しているし、またそれだけの實質を有したればこそ労働貨幣論批判もその根拠を有するものとしてマルクスによって自信をもって主張されえたのである。だが他面、不十分さはやはり不十分さである。今日私たちが『要綱』における価値論の成熟度を——『資本論』を基準として——測定するばあい、そのもっとも重要な論点はここにみられるのである。それというのも前述のように価値本質論を基礎にして価値の他の諸局面に関する理論が確立するからである。

## ii 価値形態論

商品価値の本質論の成立——それは同時に商品の本質論の成立を意味する。——によって労働生産物の商品形態に固有の価値形態が問題意識の対象となり、価値形態が解明されることとなる。しかし『要綱』においては、価値形態の四つの段階とそれぞれのあいだの移行（発展）とが解明されることなく（もっともそれらについての断片的言及はある。）、<sup>(42)</sup>むしろ価値形態の最後の段階である貨幣形態についての記述があるのみである。それは貨幣の機能——とくに諸価値の尺度としての機能——

(41) *ibid.*, SS. 87-89. 訳. pp. 91-93. 『資本論』においては, SS. 87-88. 訳. pp. 98-99. なお『経済学批判』中における「一般的労働としての社会的労働」の指示については, *Kritik*, SS. 31-32, 36, 42, 53. 訳. pp. 49-50, 56, 66, 83 をみよ。

(42) ロスドルスキーは『要綱』において、『資本論』でいうところの「簡単な価値形態」、「全体的な価値形態」、「一般的価値形態」という交換の三段階の連続が再発見されるとのべている。(R. Rosdolsky: *op. cit.*, S. 148.)

についての記述中にみられる。要するに貨幣は商品の価値の外在化であり、諸商品間の使用価値としての不等性関係と価値としての相等性関係との矛盾の解決としてうまれたとみられている。ここに商品価値の内在的尺度より外在的尺度への移行の認識がある。〔後出ivの(2)をも参照〕価値形態の発展論がないし、最も基本的な「簡単な価値形態」の詳論がないが、価値形態論の核心となるべき部分があるのである。価値形態＝当面貨幣形態の本質（換言すれば「諸価値の尺度としての貨幣とは何か？」）が理解されている。こうして実践的には労働貨幣論の批判が可能となり、また理論的には価値が交換価値、当面価格と区別して理解されることで、つぎに価値の実体論が用意されることとなる。ここでは価値形態に関する四つの根本命題をしるしておくとする。

### 1 諸商品の価値関係を基礎として交換関係の成立しうること。

(1) 「時々刻々、計算、簿記等々では、私たちは諸商品を価値章標に転化し、商品の素材やそのあらゆる自然的諸属性から抽象して、たんなる交換価値として確定する。紙上で、頭のなかでは、こうした変態はたんなる抽象によっておこなわれている。しかし現実の交換では、こうした抽象を実現するために、一つの現実的な媒介が、一つの手段が必要である。商品は、その自然的諸属性においては、いつでも交換できるわけのものではなく、またいかなる他の商品とも交換できるわけでもない。商品は、自分にたいするその自然的同等性において指定されているのではなく、自分自身とひとしくないものとして、なにか自分とは不等のものとして、交換価値として指定されている。私たちはまず、商品を交換価値としての自分に転置し、次いでこの交換価値を他のそれと比較し、取りかえることのできるようにしなければならない。もっと原始的な物々交換では、二つの商品がたがいに交換されるとき、各商品はまず自分の交換価値を表わす一つの章標に、たとえば西アフリカ海岸のあるニグロにあっては、xパール (bar) にイコールとして等置される。一方の商品イコール1パール、他方の商品イコール2パール、この割合でそれらが交換される。諸商品は、それらが相互に交換されるまえに、まず頭のなかで、また言葉でパールに転化される。諸商品は交換されるまえに評価されており、しかも評価するためには、たがいに一定の数量比例関係にもたらされなければならない。諸商品はかような数量比例関係にもたらし、通約しうるようになるためには、諸商品は同じ呼称 (単位) を受けとらなければならない。(パールは、一般に割合がただ抽象によってのみある特殊の化身をうけとるように、たんなる想像上の実存化をもち、それ自身さらに個体化されることができる。)<sup>(43)</sup>

ここで明白に諸商品が交換されるためにはまず諸商品の間価値関係の成立する必要があること、これに関連して各商品の使用価値存在と区別された価値存在が確認されるとともにここに貨幣の諸価値の尺度 (および計算貨幣) の機能が指示されているのである。諸価値の尺度 (および計算貨幣) は

(43) *Grundrisse*, SS. 60-61. 訳. pp. 63-64. ちなみに本文中の交換価値という用語はのちに価値とのべられているものをあらわすのに用いられている。この点についてのロスドルスキーの注意 (R. Rosdolsky: *op. cit.*, SS. 140-1. Fußnote 8.) をみよ。またトゥーホツェーレルは、『要綱』においては交換価値という用語がまだ価値とその現象形態との双方にたいして用いられているという。(W. Tuchscheerer: *op. cit.*, S. 384.)

現実の交換において諸商品の価値存在の抽象を実現するための「媒介」、「手段」としてみなされている。例示として用いられている西アフリカのパールは、計算貨幣の一種であろうが、計算貨幣（および諸価値の尺度）としての貨幣の実存が観念的なものにすぎないことがしるされており、そのかぎりにおいて貨幣の計算貨幣（および諸価値の尺度）と流通手段との機能上の差異、これに関連して諸商品の価値関係と交換関係との区別がマルクスによって把握されていることがうかがえることはいうまでもない。しかしもともとこの文節は「貨幣に関する章」に位置しており、価値形態の根本命題が貨幣論の次元であつかわれていることに私たちは留意すべきであろう。

(2) 諸商品の価値関係を基礎とする交換関係の成立については引きつづく個所でさらにのべられているが、これについては省略する。要するに諸商品の価値関係においては商品の価値存在は単なる抽象の産物であるが、「現実の交換にさいしては、抽象はふたたび対象化され、象徴化され、章標を通じて実現されなければならない。」<sup>(44)</sup>こうして「交換価値の意識された章標」としての貨幣が成立するようになる。

2 商品の二要因中の価値は商品の外部に貨幣として独立して実存すること。

(1) 「価値としては、商品は貨幣である。だがしかし商品が、あるいはむしろ生産物ないし生産用具が価値としての自分から区別されているがゆえに、価値としての商品は生産物としての自分から区別されている。価値としての商品の属性は、商品の自然的実存(natürliche Existenz)とは相異なる実存をとることができるだけでなく、とらなければならない。なぜか？ 諸商品は諸価値としてはただ量的にのみたがい相異なっているから、どの商品も質的にはそれ自身の価値とは相異なっていないなければならない。したがって商品の価値はまた、商品と質的に区別されうる実存をもたなければならない。しかも現実の交換では、こうした可分離性が現実の分離にならない。なぜなら諸商品の自然的な差別が、それらの経済的な等価性と矛盾せざるをえず、両者は商品が二重の実存(eine doppelte Existenz)を取得し、自然的な実存とならんで純粋に経済的な実存を取得することによってのみ、並列して存続できるからである。」<sup>(46)</sup>

この一文をよくよむと商品の価値関係と交換関係とが必ずしも明確に区別されていないかのようと思われる。すなわち一商品における使用価値と価値との存在、使用価値としての諸商品間の質的差別と価値としての諸商品間の質的同一性との矛盾が一商品と貨幣との外的対立となるとのべられているが、このばあいの貨幣はまず諸価値の尺度としての観念的定在たる貨幣(金)であるはずである。しかしこのような関係が「現実の交換」における事象としてのべられているので、あたかも価値形態論と交換過程論との区別が確立していないかのようであるが、じつはそうではなく叙述の上でこの点が明示されていないにとどまる。(なお「要綱」中の他の個所をも参照。)むしろここでより注

(44) Ibid., S. 62. 訳. p. 65.

(45) Ibid., S. 63. 訳. p. 66.

(46) Ibid., S. 60. 訳. pp. 62-63.

目すべきことは、商品内部の対立の外在化という点に価値形態、その完成としての貨幣形態の成立の理由がもとめられていることである。

(2) 「簡単に言えば、貨幣の特別な諸属性として教えあげられているいっさいの諸属性は、交換価値としての商品の諸属性、つまり生産物としての価値(使用価値のこと——引用者)とは区別された価値としての生産物の諸属性である。(商品自体とならぶ特殊な実存(besondere Existenz)としての商品の交換価値は、貨幣である。あらゆる諸商品がひとしくされ、比較され、測られる形態、あらゆる諸商品が解消していく形態、あらゆる諸商品に解消していく形態、つまり一般的等価物(das allgemeine Äquivalent)<sup>(47)</sup>である。)

ここでも一般的等価物としての貨幣が商品の価値存在のいわば疎外されたものであることが明白にしるされている。だから貨幣の諸属性として教えあげられているものが価値としての商品の諸属性と同一視されるのは当然である。

(3) 「生産に関する章は、客体的には結果としての生産物をもっておわり、流通に関する章は、商品をもってはじまる。そしてその商品自体がまたもや使用価値と交換価値(したがってまたこの二つとは異なる価値)であり、両者の統一としての流通である。——もっともこの統一は、形式的なものにすぎず、したがって経済外的なものである消費のたんなる対象としての商品と、自立化された貨幣としての交換価値とに——分解する。」<sup>(48)</sup>

この一節は「貨幣に関する章」のうちで叙述のプランについてしるした個所にある。

3 貨幣形態の萌芽が商品の価値性格のうちにあること。

「価値は商品の社会的関係であり、商品の経済的質である。一定の価値をもつ一冊の書物と、同じ価値をもつ一塊のパンとが相互に交換され、それらは同じ価値であって、ただ相異なった物質のうち存在するにすぎない。価値としては、商品は同時に他のすべての諸商品にたいする、一定の割合での等価物である。価値としては、商品は等価物である。等価物としては、商品のすべての自然的属性は商品において消失している。商品は他の諸商品にたいして、もはや質的に特殊な関係にあるのではなく、他のすべての商品の一般的尺度であり、また一般的代表物、一般的交換手段でもある。価値としては、商品は貨幣である。」<sup>(49)</sup>

ここでは商品は使用価値と価値との統一物であるが、価値としての商品においては使用価値としての属性、自然的属性が消失しているとのべられている。それというのも価値は商品の社会的関係であり、経済的質であるからである。ここではさらに貨幣の発生 of 必然性が商品の「一般的尺度」としての性質のうちにもとめられ(したがって「一般的価値形態」が予想されている。)だから「価値と

(47) Ibid., S. 60. 訳. p. 63. なお1858年4月2日付エンゲルス宛マルクスの手紙に曰く「価値の一般的諸性格とある一定の商品等々の価値の素材的定有との矛盾から——この一般的諸性格はのちに貨幣に現われるものと同一である。——貨幣という範疇が生ずる。」(Briefe, S. 89. 訳. p. 85.)

(48) Grundrisse, S. 227. 訳. p. 241.

(49) Ibid., SS. 59-60. 訳. p. 62.

しては、商品が貨幣である。」ということになる。すなわち商品自体の潜在的貨幣性質が端的に指摘されているのである。

#### 4 貨幣の必然性と価値表現の両極

さいごに価値形態論の要約として貨幣の必然性と価値表現の両極についての記述と考えられる箇所から重点的に抄出するが、ここでも価値形態がけっきょく貨幣形態の次元で把握されており、また結論的には労働貨幣論批判となっていることに注意していただきたい。(なおこの引用文は注52および注53で所在を示した引用文と関係している。)

「……バーターにおいては、交換価値はただ即自における生産物である。つまり生産物は交換価値の最初の現象形態であるが、しかし生産物はなお交換価値として措定されていない。第一にこうした規定は、全生産をおおうのではなく、ただ生産の余剰だけに関係し、したがって多かれ少なかれそれ自身余計なものである(交換自体と同じ)。……自己の生産の余剰が偶然に他人の生産のそれと交換される物々交換は、一般に生産物の交換価値としての最初の出現であり、偶然の欲望、嗜好その他によって規定されている。しかしもしも物々交換が継続され、自分自身のうちにその不断の更新のための手段をもつ連続的な行為となるならば、うわべはやはり偶然のように見えながら、相互的生産の規制による相互的交換の規制が次第次第にはいりこんできて、けっきょくいっさいを労働時間に解消してしまう生産費が交換の尺度となることであろう。このことは、どのようにして交換が生成し商品の交換価値が生成するかを、私たちにしめしている。……商品は、他の一つの商品で表現され、したがって関係として表現されるかぎりでのみ、交換価値である。1シェッフェルの小麦はこれこれシェッフェルの裸麦に値する。このばあい、小麦が裸麦で表現されるかぎり、小麦が交換価値であり、裸麦が小麦で表現されるかぎり、裸麦が交換価値である。二つのうちどれかがただ自分にだけ関係するかぎりでは、それは交換価値ではない。さらに貨幣が尺度として現われる関係においては、貨幣自体は関係としても、交換価値としても表現されないで、一定の物質の自然的な量として、金または銀の自然的な重量部分として表現されている。一般に他の一商品の交換価値を表現している商品は、交換価値として、関係として表現されないで、その自然的性状での定量として表現されている。……どんな商品も貨幣の価格を表わさない。……このことこそ価格を交換価値から区別するものであるが、交換価値が必然的に価格規定にまですすむものなることは、すでに私たちがみたところである。それゆえ、労働時間そのものを貨幣にしたいと思っている連中、つまり、価格と交換価値との区別をしながら、しかもこの区別をしないようにしたいと思っている連中のばかさかげん。」<sup>(50)</sup>

(50) Ibid., SS. 118-121. 訳 pp. 124-7. 石垣博美氏は『要綱』中のこの部分を抄出されてそこに「周知の価値形態論についての端緒的考察」、「萌芽的抽出」を見出されているが(『経済学批判要綱』における方法論上の一考察、玉城肇、末永茂喜、鈴木鴻一郎編『マルクス経済学体系』上巻、1957. pp. 129-130.)、大内秀明氏はそれを「疑問」とされている。(『価値論の形成』1964. p. 145.)

#### iii 価値実体論

価値形態論によって価値と交換価値(=価格)との区別がなされることで価値そのものの研究が可能となる。価値の尺度(測定)にさきだち価値の実体(内実)が問題となるのは当然である。だが(1)価値の実体が何であるかは、——『資本論』の叙述におけるように明確にはないが——「使用価値の捨象」を媒介として金と交換される商品の等置関係における第三の共通物の想定によって推論されている。さらに(2)等置の前提としての「頭のなかでの転態(Transformation im Kopfe)」が論じられ、事実上「商品に表わされる労働の二重性」が論じられることによって、(3)この基礎の上に生産過程における不変資本価値(C)の移転と新価値(v+m)の追加とが論じられる。

(1)「交換価値として措定された生産物は、本質的にはもはや単純な生産物として規定されていない。それはその自然的な質とは相異なった質において措定されている。つまり関係として措定されており、しかもこの関係は一般的であって、一商品にたいするものでなく、あらゆる商品、ありとあらゆる生産物とのそれである。したがって生産物は、一般的な関係を表わしている。つまり、一般的労働、社会的労働時間の一定量の実現としての自分に関係し、このかぎりでは生産物の交換価値で表わされる関係で他のすべての生産物にたいする等価物である生産物。交換価値は、生産物の自然性をまったく度外視して、あらゆる生産物の実体としての社会的労働を想定している。一つのものとの関係することなしにはなにも一つの関係を表現できず、一般的なものと関係することなしには、一般的な関係を表現することはできない。労働は運動であるから、時間が労働の自然的尺度である。もっとも素朴な形態のバーターは、実体としての労働を想定し、商品の尺度としての労働時間を想定している。このことは、バーターが規則的になり、連続的になり、自分自身のうちに自己の更新のための相互的条件をふくむべきものとなれば、やはり現われでてくるのである。——商品は、他の一つの商品で表現され、したがって関係として表現されるかぎりでのみ、交換価値である。」<sup>(52)</sup>(この文中でバーターについての価値法則のべられていることに注目したい。)<sup>(53)</sup>「1クォーターの小麦が1オンスの金という価格をもつということは——金と小麦とは、自然的対象としてはまったく相互になんの関係もなく、そのものとしては相互になんらの尺度でもなく、相互に無関心であるのだから——、1オンスの金自体がふたたびその生産に必要な労働時間との関係におかれ、かくして小麦と金との両者が、第三者、労働との関係におかれて、この関係で両者が等置されていること、それゆえ両者は交換価値としてたがいに比較されていること、そうしたことによってもちろん見いだされている。」

(51) 前引のようにトゥーホジューレルおよびツイゴツキーは、『要綱』における労働の二重性格の発見を指摘しているが(注30)、リヒターもいう。「マルクスはすでに『要綱』において商品を生産する労働の二重性格の問題を解決した。」(R. S. H. Richter: Die Herausbildung der marxistischen politischen Ökonomie. 1969. S. 159.) なお『要綱』における「労働の二重性」論の研究については、米田康彦「1850年代におけるマルクスの『労働の二重性』把握」『商学論集』38巻1号、1969年7月がある。

(52) Grundrisse. S. 119. 訳 p. 125.

(53) Ibid., SS. 120-1. 訳 p. 126.

(2) 「諸生産物(または諸活動)は、諸商品としてのみ交換される。交換のうちにある諸商品自体は、諸価値としてのみ実存し、このようなものとしてのみ比較される。私が1エルの亜麻布と交換できるパンの重さを規定するために、私はまず、1エルの亜麻布イコールその交換価値、すなわちイコール $\frac{1}{x}$ 労働時間とおこう。同様に私は、1ポンドのパン、イコールその交換価値、イコール $\frac{1}{x}$ または $\frac{2}{x}$ 等々労働時間とおこう。私は、商品はいずれもある第三者にイコールであり、すなわち自分自身とはひとしくないものとする。ちょうど諸比例関係が一般に、関係する諸主体とは区別して確定されなければならないばあい、考えられることができるだけであるように、両者とは相異なるこの第三者は、ある比例関係を表現するから、まず頭のなかに、表象のうち実存する。一生産物(または活動)が交換価値になることによって、生産物は一定の量的な比例関係に、ある比例関係に——すなわち、他の諸商品のどれほどの分量がそれにひとしいかを表わす、すなわちその等価物を表わす数に、あるいは、どのような割合でそれは他の諸商品の等価物であるかを表わす数に——転化されるばかりでなく、同時に質的にも転化され、ある他の要素(Element)に転置されなければならない。それとともに、両商品は同じ単位をもった名数となり、したがって通約しうるようになる。商品はまず労働時間に、したがって、商品とはなにか質的に相異なるものに転置されなければならない(質的に相異なるというのは、1)商品は労働時間としての労働時間ではなくて、物質化された労働時間、つまり運動の形態にあるのではなくて、静止の形態にある労働時間、過程の形態ではなくて、成果の形態にある労働時間であるから。2)商品は、ただ表象のうちだけに実存する労働時間一般〔それ自体商品の質からきりはなされた、量的にのみ相異なる労働にすぎない〕の対象化ではなくて、一定の自然的に規定された、他の労働とは質的に相異なる労働の所定の成果であるから)、そのうえで商品は、一定量の労働時間、一定の労働量として、他の量の労働時間、他の労働量と比較される。たんなる比較——生産物の評価——のためには、商品の観念的な価値規定のためには、こうした頭のなかでの転置をおこなうだけで十分である。(転置、そのばあいには生産物は、量的な生産関係の表現として実存するにすぎない。)<sup>(54)</sup>

ここにいわゆる「使用価値の捨象」による商品価値の実体の導出といわれる推論の過程の真意が示されている。諸生産物は交換されるにさいして諸商品としての資格においておこなわれ、しかもこのばあい諸商品は諸価値としてのみ実存する。諸商品は諸価値としてのみ比較されるのであるが、このばあいすでに価値量は労働量、労働時間によって規定されると考えられている。諸商品は価値という第三者に転置されることによって相互の間一定の量的な比例関係をむすぶことができることとなる。この転置にさいしてありのままの商品とは質的に相異なるものへの転置であるということ、いわゆる「使用価値の捨象」が事実上考えられているのはあきらかである。諸商品の価値関係の確定のためにおこなわれる価値としての商品の抽象は、逆にいえば商品の使用価値の捨象を意味しており、それが「頭のなかでの転置」として行われていることに注目したい。したがって価値関係

(54) *ibid.*, SS. 61-62. 訳. pp. 64-65.

は生産関係を表現する実存的関係であるとはいえ、それは——商品の価値への転置がのちに「観念上の二重化 (*ideelle Verdopplung*)」<sup>(55)</sup>ともして行われているように——せいぜい観念的次元でのことであり、それが現実の交換関係の次元と区別されるのは当然である。

(3) 労働の二重性(見地)の確立。「資本に関する章——第1編資本の生産過程」中において生産物への不変資本価値(C)の移転と新価値(v+m)の追加が『資本論』におけるほどに明確にではないまでも説明されている。<sup>(56)</sup>

こうして商品の二要因の区別(と統一)が事実上つぎのように把握されている。

「商品の価値は、商品自体からは区別されている。商品が価値(交換価値)であるのは、(現実のまたは表象された)交換においてだけである。商品の交換能力一般だけでなく、商品の独自の交換可能性が価値なのである。価値は、商品が他の諸商品と交換される割合の指数(Exponent)であり、商品が生産中に他の諸商品(物質化された労働時間)とすでに交換されてしまっている割合の指数でもある。価値は、商品の量的に規定された交換可能性である。諸商品たとえば1エルの棉花と1マーズの油とは、棉花および油としてみれば、当然に相異っており、相異なった諸属性をもち、相異なった尺度で測られ、通約することができない。諸価値としては、すべての諸商品は質的にひとしく、ただ量的にのみ区別されているから、一定の量的比率でたがいに計量しあい、代りあう。(交換されるし、相互に兌換される。)<sup>(57)</sup>」

ここでは使用価値という言葉こそ使用されていないが、商品——たとえば棉花と油——が使用価値としての商品であり、また価値としての商品であるとみなされ、このそれぞれの属性の相違がのべられている。すなわち前者は質的に相異なったものであり通約不可能であるが、後者は質的に相等的なものであり、通約可能、したがって比較可能である。

「価値としては、どの商品も一様に分割でき、その自然的な定有では、そうではない。価値としては、商品はどんなに多くの変態と実存諸形態とをへめぐろうとも、依然として同じままである。現実には、諸商品はひとしくはなく、いろいろの欲望体系に相応しているからこそ交換される。価値としては、商品は一般的であり、現実の商品としては、一つの特長性である。価値としては、商品はつねに交換可能であり、現実の交換では、商品が特殊の諸条件を満たすばあいだけ、交換可能である。価値としては、商品の交換可能性の尺度は、商品自身によって規定されている。交換価値は、商品が他の諸商品に代替するまさしくその比例関係を表現している。現実の交換では、商品は、その自然的諸属性と関連し、また交換者の諸欲望に相応する諸量で、交換可能であるにすぎない。<sup>(58)</sup>」

(55) *ibid.*, S. 63. 訳. p. 66.

(56) *ibid.*, SS. 259-276. 訳. pp. 276-296.

(57) *ibid.*, S. 59. 訳. p. 62.

(58) *ibid.*, S. 60. 訳. p. 63. なお使用価値と価値(交換価値)との区別と統一についてつぎの箇所を参照。SS. 178-9. Fußnote, 180, 540. 訳. pp. 188-9, 190, 595-6. また商品の使用価値と価値とがそれぞれの独自の尺度を有することについては、SS. 506-7. 訳. pp. 556-7. 参照。

この文章では諸商品の価値関係と交換関係との区別(相違)が商品の二要因の記述に関連してのべられていることに注目したい。すなわち商品の自然的諸属性によって制約される使用価値存在は、現実の交換関係にかかわるものであり、商品の価値存在は価値関係にかかわるものである。

さいごに『要綱』における「資本にかんする章——第3編果実をもたらすものとしての資本」の「1) 価値」と題する断片中から商品の二要因の記述を抄出する。

「ブルジョアの富が自己をしめす最初の範疇は商品の範疇である。商品は二つの規定の統一として現われている。商品は使用価値であり、なんらかの人間の欲望の体系を充足する対象である。これは、もっとも相違した生産諸時代にさえも共通でありうる。したがってその考察は経済学のかなたにあるところの、商品の素材的側面である。……ところで使用価値はどのようにして商品に転化されるのか? 交換価値の担い手。直接商品で合一しているにもかかわらず、使用価値と交換価値とは、同じく直接に分離する。交換価値は使用価値によって規定されては現われなければならないばかりでなく、反対に商品は、その所持者が商品にたいし使用価値としての態度をとらないかぎりでは、はじめて商品となり、はじめて交換価値として実現される。かれが諸使用価値をわがものとするのは、商品の譲渡、他人の諸商品とのその交換を通じてにはかならない。譲渡を通じての領有は、社会的生産体制の基本形態であり、交換価値はこの体制のもっとも単純な、もっとも抽象的な表現として現われている。」<sup>(59)</sup>

#### iv 価値量論

価値の実体が決定されれば尺度論は容易である。価値の内在的尺度は実体の量にほかならないからである。(1)まず商品の交換は等価交換としておこなわれるとのべられ、(2)価値尺度として労働量——労働時間があげられる。

(1)「商品(生産物または生産用具)はいずれも、一定労働時間の対象化にイコールである。商品の価値、商品が他の諸商品と交換され、または他の諸商品がその商品と交換される割合は、その商品に実現されている労働時間の分量にイコールである。たとえば商品が労働時間1時間にイコールであれば、それは労働時間1時間の生産物である他のいっさいの諸商品と交換される。(この全推論は、交換価値イコール市場価値、実質価値[Realwert]イコール価格、という前提のうちにある。)」<sup>(60)</sup>ここでは諸商

(59) *ibid.*, S. 763. 訳. pp. 853-4. この引用文の存する断片——1頁半——については、「成立」pp. 58-59. にしるしであるように、その表題は「価値」であるが、実質はあきらかに商品であり、『要綱』の冒頭の第1編の書きだしをなすはずであった。だが、それは文字通り断片でおわり、マルクスはまもなく『経済学批判』の執筆に着手したのである。というのは、この断片をふくむ「ノート VII」の執筆時期は1858年2月下旬より6月初旬であり、『経済学批判』の執筆開始は同年8月10日頃であるからである。ちなみに「ノート VII」がかかれてのち最後の「ノート B', B', B' II」がかかれているが、これは同年8月初旬より9月中旬にかけて、したがって『経済学批判』執筆のはじめ頃に該当する。この断片についての言及としてつぎのものがある。鈴木鴻一郎編『貨幣論研究』1959. pp. 91-99. (降旗節雄稿)。佐藤金三郎『『経済学批判』体系と『生産一般』』『経済学雑誌』39巻6号, 1958年12月. pp. 44-45. 平田清明「商品論の復位——歴史理論としての商品論の発見——」『一橋論叢』56巻6号, 1966年12月. pp. 61-63. 同「歴史理論としての『資本論』」『思想』1967年5月. pp. 46-47.

(60) *Grundrisse*, S. 59. 訳. p. 62.

品の交換は価値通りにおこなわれると仮定し(カッコ内の文章をみよ。そこには「市場価値」、「価格」の語がみられることに注目したい。), この価値量自身は諸商品に対象化され実現されている労働量、労働時間によって決定されると考えられている。

(2)すでに引用したパーターについて論じた個所(p. 21)で商品価値の実体が労働であるから、当然商品価値の尺度は労働時間であるという一節があった。ここではむしろ価値の内在的尺度から外在的尺度への移行を論じた一節を引用するとしてしよう。

「価格と価値とのあいだの区別、商品を生産する労働時間によって測られる商品と、商品がそれと交換される労働時間の生産物とのあいだの区別、この区別は商品の現実の交換価値が表わされている尺度としての第三の商品を必要とする。価格は価値にひとしくないので、価値を規定する要素——労働時間——は、価格が表わされる要素ではありえない。なぜなら労働時間は、規定するとともに規定せず、労働時間そのものにひとしいとともにひとしくないものとして、自己を表わさねばならなかったはずだからである。価値尺度としての労働時間は、ただ理念的にだけ実存するのだから、諸価格の比較の材料としては役立ちえない。(ここで同時に、価値関係が貨幣において、一つの物質的な、かつ特殊化された実存を、どのようにして、またなにゆえに受けとるかということが明らかになる。この点はさらに詳細に論ずるはず。) 価値と価格との区別は、諸価値は諸価格としては、それ自身に固有なものとは別の尺度基準で測られるということを要求する。価値と区別された価格は、必然的に貨幣価格である。この点に、価格と価値とのあいだの名目的な区別が、両者の実質的な区別を条件としていることが現われている。」<sup>(61)</sup>

なお価値の量的規定に関連して不変の価値尺度論を批判するベイリーの見解の肯定的立場での抜萃や、複雑労働の単純労働への還元論<sup>(62)</sup>のあることを附記しておく。

要するに『要綱』中には価値論の体系的展開はおこなわれていないが、その主要な局面は——たとえその多くのものが萌芽的形態にとどまるにしても——存しているといつてよいであろう。執筆時期の上で『要綱』にひきつづく『経済学批判』中の価値論が『要綱』に記述されている内容を基礎にして体系化したものであることはいままでもない。それは『資本論』中の価値論ほどに完全なものではないが、それへの一歩をふみだしたものであるといえる。

(61) *ibid.*, SS. 58-59. 訳. p. 61. この文章は注(50)で所在を示した文章とともに価値形態(=貨幣形態)の必然性を示すものである。

(62) *ibid.*, S. 693. 訳. pp. 768-9.

(63) *ibid.*, S. 506. 訳. p. 556.

(64) 「カール・マルクスの労働価値論は『要綱』においていろいろの関連で展開される。なるほど、それとともに価値論の体系的説明はまだ存しないが、価値論のすべての本質的要素(価値、価値形態、価値表現、価値形成労働、価値形成、価値法則、等)はすでに科学的に基礎づけられる。」(R. S. H. Richter: *op. cit.*, S. 158.)